

犬の卵巣顆粒膜細胞腫における免疫組織化学的検索の適応

小野澤花純¹⁾、二瓶和美²⁾、長峯英路¹⁾、大川内充輝¹⁾、内田和幸³⁾

1) サンリツセルコバ検査センター、2) 日本動物高度医療センター、3) 東京大学獣医病理学研究室

犬の卵巣腫瘍は、当病理検査センターにおいて組織検査を実施した卵巣病変の約2割程度を占める。過去5年間の診断内訳は顆粒膜細胞腫が最も多く約85%を占め、次いで未分化胚細胞腫、乳頭状腺腫／腺癌の順であったが、顆粒膜細胞腫は組織像が多様なためHE染色標本では診断に苦慮する場合もある。本研究では顆粒膜細胞腫の診断における免疫組織学的手法の適応を検討した。【材料と方法】当センターで顆粒膜細胞腫と病理診断した犬の卵巣腫瘍8例を用いた。HE標本により腫瘍の増殖形態および細胞形態を検索した。免疫染色にはサイトケラチン(AE1/AE3)、vimentin、inhibin- α 、PGP9.5に対する一次抗体を使用した。【結果】腫瘍の増殖形態は①嚢胞状、②嚢胞状／柵状、③腺腔形成性／乳頭状、④腺腔形成性／び漫性、⑤び漫性、⑥充実性の6タイプに分類した。細胞形態は①高分化で正常な卵胞上皮に類似、②セルトリ細胞に類似、③立方～円柱状、④多形性の4タイプが認められた。免疫染色ではvimentinには全ての細胞が陽性で、卵胞上皮やセルトリ細胞様の形態を示す細胞の多くはサイトケラチン(AE1/AE3)にも陽性であった。また卵胞上皮様、セルトリ細胞様、立方～円柱状細胞の一部はinhibin- α に陽性であったが、多形性を有す細胞は陰性であった。PGP9.5については多形性を示す細胞の一部が陽性であった。【考察】HE染色標本のみで顆粒膜細胞腫と診断していた腫瘍には、表面上皮由来の腫瘍や胚細胞-性索間質混合腫瘍との鑑別が必要な腫瘍が含まれていると思われるが、これらを厳密に鑑別することは困難であった。サイトケラチンは多くの症例で陽性であり表面上皮と卵胞上皮の鑑別が困難であった。Inhibin- α は卵胞上皮のマーカーとして有用であったが腫瘍細胞では染色性が低下した。このため比較的未分化な細胞にも応用可能なマーカーの更なる検討が必要と思われる。今回の検索の結果、多形性が強い腫瘍については特に胚細胞-性索間質腫瘍との鑑別が必要と考えられた。